

自主性育成と大学教育

—ボランティア活動を行う学生へのインタビュー調査から—

青木理奈*1・鈴木静*1・小佐井良太*1・福井秀樹*1
Email: aoki.rina.mg@ehime-u.ac.jp

*1: 愛媛大学法文学部人文社会学科

◎Key Words ボランティア活動, 自主性, 大学教育

1. はじめに

本研究¹⁾の目的は、アクティブラーニング型の大学授業と学生ボランティア活動との関係につき、自主性育成の観点から現代的な特徴と課題を明らかにし、今後の大学教育の方向性を展望しようとするものである。

1990年代半ばまで、大学生のボランティア活動は、その名の通り大学生が自主的に行う活動であり、大学授業との関係で捉えられることは少なかった。阪神・淡路大震災後の1998年、文部科学省は高等学校におけるボランティア活動等に係る単位認定を認め¹²⁾、東日本大震災が発生した2011年には、大学に対しても授業の一環でボランティア活動に参加する場合に単位を認める方向性を打ち出した¹⁰⁾。また、2005年には文部科学省中央教育審議会答申において、大学は「社会貢献・地域貢献の役割を『第三の使命』としてとらえていくべき時代」との方向性が示され、大学の授業も、社会との連携が意識されるようになった¹¹⁾。

本来、ボランティア活動とは、当事者が担う課題に対して①対人性・連帯性、②開拓性・先駆性、③運動性・批判性・代弁性を有し、これらの役割を果たす意味でも、「ボランティア活動・運動」は、その土台に結社の自由や表現の自由などの「市民的自由」が保障されていることが重要であると考えられてきた⁴⁾。単位付与を前提とする大学授業を通じて、学生たちのボランティア活動を促進することは、学生の「市民的自由」、とりわけ学生の「自主性」を阻害するおそれはないのだろうか。一方で、実際に大学授業を契機に、ボランティア活動を発足させ運営している学生が少なくないことを、どのように捉えたらよいのだろうか。

本稿では、大学授業を契機に、ボランティア活動に参加し、継続的に活動をしている学生へのインタビューを通じて、大学授業が彼／彼女たちに与えた影響の特徴と課題を整理するものである。さらに、学生には、ボランティア活動を始める契機や活動を続けていく上で影響があったと考える授業をあげてもらい、その科目がどのように魅力的であったかを尋ねた。本稿では、学生たちの自主性育成に貢献すると思われる授業について考察し、その特徴と課題を明らかにする。

2. 調査の概要及び結果

本研究では、①ボランティア活動を行っている学生へのインタビュー調査と、②活動を開始する契機となった、あるいは、活動を続けていく上で影響があったとする大学授業について、授業の詳細を調査した。

①については、報告者が所属する愛媛大学の大学生6名にインタビュー調査を実施した。調査目的は、2019年現在、行政や地域に直接関わる社会活動に携わっている学生ボランティア組織の現状を把握し、ボランティア活動を行う学生の自主性と大学教育との間にどのような関係があるかを考察することにある。本稿では、トランスクリプトを整理し、学生ボランティア活動の契機、そして大学教育について抜粋し、インタビュー内容は趣旨を損なわないように再構成している。

②については、報告者が所属する愛媛大学の大学生3名にメールとウェブ会議システム「Zoom」を利用してインタビュー調査を実施した。調査目的は、①でボランティア活動を開始する契機となった授業について、より掘り下げて詳細を聞き、これらの授業の特徴を把握することにある。

2.1 対象者と調査日時

①2019年8月～2020年3月の間にインタビューによる調査を3件行った。調査対象者は、Table1のA～Fの6名(A、B、C、Dの4名は同席している)で、以下のとおりである。

Table1: 調査対象者の属性

学生	学年	性別	活動領域	調査
A	M1	F	防災(団体)	①②
B	B3	M	防災(団体)	①
C	B2	M	防災(団体)	①
D	B1	F	防災(団体)	①
E	B3	M	野宿者支援(団体)	①②
F	B4	M	国際貢献(個人)	①
G	M2	F	防災(団体) 障がい学生支援(団体)	②

インタビュー調査は、愛媛大学城北キャンパス内の研究室で行い、インタビュー時間は、それぞれ2時間であった。

②2020年5月にインタビュー調査を行った。調査対象者は、①のインタビュー調査対象者のうち2名(A、E)と、またAからDまでと同じボランティア団体に所属している1名(G)に行った。インタビュー調査は、メールによる質問及び回答に加え、「Zoom」を利用した面接方式で行った。面接方式によるインタビューは、30分程度行った。あわせて、インタビュー対象者から関連する授業資料等の提供を受けた。

2.2 倫理的配慮

本調査は、愛媛大学法文学部研究倫理審査委員会の承認を得て実施している。また、当日のインタビュー内容の録音承諾を得た上、トランスクリプトについては後日、内容確認をしてもらい掲載の許可を得ている。

2.3 主なインタビュー内容

本調査では、①では、「どのような経緯で、ボランティア活動をするようになったのか」、「普段の活動は、どのようなことをしているのか」、「普段の活動で困っていることや問題だと思っていることはあるか、具体的にどのようなことか」、「大学や教員に望むこと」について、半構造化されたインタビュー手法によるデータ収集を行った。②では、①のインタビュー時に回答があった、「ボランティア活動を始めるきっかけとなった授業」について、授業内容を問う調査を行った。あわせて、対象者があげた大学授業につき、教員が学生に示す講義・授業の授業計画である「愛媛大学シラバス」により、具体的内容を確認した。

2.4 インタビュー分析結果

①-1 活動を始める経緯

Dを除く全員が、愛媛大学が提供する授業の履修を契機にしている。その授業の履修動機は、「必修科目だったため」(E、F)、「資格取得ができるから・就職活動に有利だと考えたため」(A、B、C)等の消極的理由であった。なお、「その分野に関心があった」と回答した者はいなかった。

①-2 授業履修から活動参加への経緯

「単位取得だけではつまらない・習ったことを活かしたい」(A、C)、「授業中に活動紹介があったため」(E)など、授業によって活動への参加意欲を高めていたことが確認された。Bは、授業担当の先生から直接話を聞いて、「じゃあやってみようかなと思ひ、参加した」と直接的な教員とのやりとりをあげた。Fは、上回生の活動紹介を聞き「活動を熱心に行っている学生が身近にいることに新鮮さを覚え、いつか自分も体験してみたい」趣旨の発言をしていることが象徴的である。

また、活動を始める経緯となった授業の履修は、いずれも1年生時点である。授業で紹介されたボランティア活動を、自らのサークル活動の一環として候補にあげるとともに、導入教育がボランティア活動を行おうとする学生たちへの刺激付けになっていたことが推測される。

①-3 ボランティア活動継続と大学授業の関係

A、B、C、D、Eは、活動に参加する契機になった授業に、次年度以降も、単位履修に関わらない「先輩学生」として授業に参加していた。A、B、C、Dは授業内にて実施されるプログラムで受講者のフォローに入り、Eは活動紹介と活動から見えてきた社会問題の現状報告を行っている。活動に参加する経緯となった授業には、単位取得後も担当教員を通じて参加する関係にある。学生は、先輩学生としての授業でのフォローや活動紹介を自らの活動と位置づけ、積極的に捉えていた。このことから、ボランティア活動を継続する際にも、大学授業が学生たちの精神的なサポートになっていることがうかがわれる。

①-4 ボランティア活動における現代的ツール利用

と運営継続上の悩み

大学授業を契機として加入した活動であっても、基本的には学生が自主的に運営、活動を行っている。そのため学生が活動を継続する際の工夫や悩みを尋ねた。

その結果、ボランティア組織内および広報活動において、防災(A~D、G)および野宿者支援(E)は、SNS(FacebookやTwitter)を積極的に利用している。新入生の勧誘においても積極的に活用し、通常の活動において仲間や人手が欲しいときには、SNSを活用している。このことは、個人で活動するFも同種の発言している。

一方で、組織内の情報共有もSNSに頼ることが多いため、メンバー間のレスポンスの迅速さや積極的行動に差があり、相手の顔や表情が直接見えないSNSでは、感情が読み取りにくいことから、活動に対しても思いや姿勢が見えにくいと悩みを抱える。学生が授業やアルバイト等で時間がとりにくいなか、対面での会議等を補う目的でのSNSが、いつしかSNSのみの情報共有や意見交換に変化している。それゆえの運営上の悩みと分析できる。

② 学生がボランティア活動を始める契機や活動を続けていく上で影響があったと考える授業内容について、A、E、Gに具体的に聞き取り、その特徴をTable2に示した。

Table2: ボランティア活動のきっかけ(影響)となった授業の特徴

授業	具体的内容
ア	テ、外、実、映、資
イ	映、学
ウ	テ、映、資、他
エ	テ、他
オ	外、実、資
カ	映、資
キ	テ、映、資
ク	テ、外、実、映、資
ケ	テ、外、実、映、資

テ=授業指定のテキスト(教科書)がある

外=外部講師による講義がある

実=実践、実務、実技等がある

映=DVD等、映像がある

学=先輩学生からの話がきける

資=資格取得につながる

他=学生からのアウトプット重視

3. アクティブラーニング型授業の有効性

ボランティア活動参加の契機になる、あるいは、活動に影響をもたらす大学授業とはどのようなものか。ここでは調査②の分析に基づき、有効な授業の具体的特徴を見ていく。

第一に、ボランティア活動への参加の契機、継続する時の支えになっている授業では、教員が学生に対して一方的に講義をする形式だけではなく、「主体的・対話的で深い学び」を目指すアクティブラーニング型の授業を実施している傾向が見えてきた。また、一見、テキストをベースに話が進められる従来型の講義だと思われる授業科目でも、学生からのアウトプットを重ねることで、能動的な学びへと変えていることが分かった。

具体的には、授業アは、関係する行政職員および専門家、

住民ら外部講師の話聞くことが出来る。あわせて学生が参加する体験型のプログラムも多い (A)。授業は、先輩学生が壇上にたち、野宿者支援ボランティア団体の活動について説明する機会がある。教員や専門家ではなく、同じ学生からの「リアルな話」がきける機会が、学生の活動参加を促す契機になっている (E)。共通しているのは、これらの授業をきっかけに、ボランティア活動を開始している点である。

第二に、ボランティア活動を継続するなかで影響を受けた授業とは、学生の心理面に影響を及ぼす内容を含む傾向がみられる。ウ〜ケの授業はGがあげたものであり、主な特徴はボランティア活動で経験する対人的な関わり、心の問題を取り上げていることである。とりわけオの授業は、カウンセリング技法を学ぶものであり、学生同士がペアになってカウンセリング技法を体験する内容である。さらに興味深いのは、継続するなかで影響を受けた授業のなかに、座学重視の授業が入ってくることである。具体的には、授業エは、講義はテキストを読みながら進めていくものであるが、Gによれば、「考えを言語化して、他者に分かりやすく伝える」重要性に気付くと回答している。

すでに先行研究から、主体性を引き出す大学教育には、「答えが存在しないリアルな世界を学生たちに突きつけることが重要」⁶⁾であるとの指摘がある。まさに、これらの授業は、リアルな世界を学生に見せて経験させている。これらアクティブラーニング型の授業は、学生のボランティア活動開始の契機になり、ボランティア活動を継続する上でモチベーションアップに繋がっている。

4. おわりに

本稿では、大学の授業を契機に、ボランティア活動に参加し、継続的に活動をしている学生へのインタビューを通じて、大学授業が彼／彼女たちに与えた影響の特徴と課題を整理した。さらに、学生には、ボランティア活動を始める契機や活動を続けていく上で影響があったと考える授業をあげてもらい、その科目がどのように魅力的であったかを尋ねた。特徴的なことは、授業履修の際には履修に際し消極的であっても、アクティブラーニング型の授業によって、学生ボランティア活動への参加意欲が増すこと、大学授業はボランティア活動を継続していくために学生の心理面を支える影響を持つ傾向が明らかになった。

一方インタビューを行った学生の発言から、新たな課題も浮かび上がってきた。学生は授業中に行われる活動紹介から、その組織に対する信頼感を増して参加する傾向にある。いわば大学教育や教員が「お墨付き」を与えた活動だからこそ、学生は参加している側面は否定できない。また、学生は、自身の知識や技術を生かせる学外の世界を求めているが、同時に多様な人が集まる学外の組織に参加する不安が大きい。このため、大学授業を通じてのボ

ランティア活動であれば、参加しやすいと感じている。活動参加へのハードルが低くなることは否定すべきではないが、大学教育が、学生の社会参加の可能性を阻む側面もあるのではないかと。学生の社会参加の橋渡しとなる大学の授業の役割が求められるのではないだろうか。今後の研究課題の一つとしたい。

最後に、今回は学生側のインタビューで大学教育という学びの場を考えてきた。今後の大学教育のあり方と学生の自主性育成という問題は、学生が感じていることと授業をする教員との目的や意識との間に温度差がある可能性もある。今後は、教員への調査、さらにはインタビューのみならず、アンケートなども用いて検証を深めていきたい。

参考文献

- (1) 青木理奈,小佐井良太,鈴木静:”学生ボランティア組織の現状と課題—愛媛大学の学生聞き取りから—”愛媛大学法文学部論集(社会科学編),48,pp1-28(2020).
- (2) 青木理奈,松本美紀,曲田清維:”2004年新居浜市水害における高校生ボランティア活動に関する研究(第2報) 高校生のボランティア意識の検討”,愛媛大学教育実践総合センター紀要,23,pp.151-164(2005).
- (3) 荒井俊行:”大学生のボランティア活動へのイメージが参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響”,日本教育工学会論文誌,40,2,pp.85-94(2016).
- (4) 岡本栄一:”ボランティア活動と福祉課題—特に当事者問題との関係をめぐって”,社会福祉学,49,3,pp.107-113(2008).
- (5) 河井亨:”学生の学習と成長に対する授業外実践コミュニティへの参加とラーニング・ブリッジングの役割”,日本教育工学会論文誌,35,4,pp.297-308(2012).
- (6) 川島,大野,小林「学生の主体性を引き出す大学教育とは」大学時報,350,p22 大野,座談会(2013).
- (7) 谷田勇人:”福祉ボランティア活動をする大学生の動機分析”,社会福祉学,41,2,pp.83-94(2001).
- (8) Matsumoto, M., Aoki, R., & Magata, K.:”2004年新居浜市水害における高校生ボランティア活動に関する研究(第1報) 防災意識形成のための高校生災害ボランティア意識と社会的役割に関する断面調査”,愛媛大学教育実践総合センター紀要,23,pp.99-110(2005).
- (9) 三谷はるよ:”ボランティアを生みだすもの: 利他の計量社会学”,pp.3-177,有斐閣(2016).
- (10) 文部科学省:”東北地方太平洋沖地震に伴う学生のボランティア活動について(通知)”(2011).
https://www.mext.go.jp/a_menu/saigaijohou/syousai/1304540.htm (2020年6月8日閲覧)
- (11) 文部科学省:中央教育審議会答申”我が国の高等教育の将来像”(2005).
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1335581.htm (2020年6月8日閲覧)
- (12) 文部科学省:”ボランティア活動等に係る学修の単位認定”(1998).
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/1247229.htm (2020年6月8日閲覧)

¹ 本研究は、JSPS 科研費 19K21723 及び愛媛大学法文学部戦略経費(2019年度)の助成を受けたものである。